
奇術師が幻想入り

衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇術師が幻想入り

【Nコード】

N1250BA

【作者名】

衛

【あらすじ】

能力をもった青年が幻想入りし、幻想郷の女の子たちときやつきやうふふできればいいなあ

現代？さよなら（前書き）

東方幻想入りの小説となります

文才能力なしです

現代？さよなら

「科学と機会の時代」となった現代

何事にも科学の力が使われ、魔法や幽霊を信じてる人など極少数なこの時代

皆科学に頼り、昔の様に子供の夢は「魔法使い」などと言わず、「科学者」と現実的な夢を語る子供が増えた

———こんな時代じゃなければ……僕も「奇術」も受け入れられたのだろうか？

炎天下の中、おぼつかない足で歩く少し大きめのケースを持つ青年が一人

細身の体で高身長、そしてまるで人を惑わすのが好きといわれる狐のような目

さらに張り付いたように、作り物の様な笑顔、まさにうさんくさを固めた様な容姿の青年

「おやおや、これはこれは奇術師さん！今日はどこにお出かけですか？」

おぼつかない足取りで歩いてる中、30代程の男二人が青年を小ばかにするような口調で話しかける
にやにやと、蔑む目で、汚い物を見るような目で

「……そうですね、今日は久しぶりに仕事が入りましたのでそこに向かつてる途中ですよ」

すると男達は驚いたように口をひらき

「おお！こんな奇術師さんにも仕事があるなんて！兄ちゃん、仕事先の人にはよく感謝しろよ」

「ガッハツハ！あんたの様な落ちぶれた、夢の無い奴に仕事があるなんてな！」

余程可笑しかったのだろう男達は青年の事などおかまいなしに笑いこげる

そんな態度をされても青年は作り物の様な笑顔を絶やさずに、男達が笑うのを止めるまでまっ
うさんくさい笑顔のまま、心は悲しみを持ったまま

「いや、悪かったな兄ちゃん、仕事に行く途中邪魔しちゃってよう」

「いえ…大丈夫ですよ」

それでは、と頭を軽く下げ、仕事先に足を進める

現代、科学の進歩により見事な発展を遂げてきた今

その中では科学の発展により、廃れていく職もあり、それが青年の奇術師、別名マジシャン

昔、まだ人が科学や機会を使いながらも、不思議な事を楽しむ事ができた時代は、マジシャンはテレビ等の引っ張りだこだった

スプーンがいきなり曲がったり、物が移動したり、または人の瞬間移動など、摩訶不思議な出来事をやったのけるマジシャン

もちろんそれらには仕掛けがあるが、人々を魅了するには十分だった

だが、時代が進むと人々は変わってしまった

世界がめぐるしく発展し、やがてマジシャン達はあまり目立たなくなってしまった

マジックはある意味、人を騙す事に似ている

本来マジックは人の目を誤魔化しながら、脅かせる、あるいは感動させるのだが、時が進むにつれてマジックの楽しみ方を間違った形で捕らえる人が増えてくる

「あいつらは俺たちを騙しながら金を貪る悪党だ」

「なにが不思議だ！よく考えればわかることじゃないか！」

「仕掛けがわかりましたよ、こんな簡単な事でお金を稼いでたのですね」

つまり、皆柔軟な考えができず、まるで思考がロボットに近い様になっ
ていき、マジックの楽しみの捕らえ方がまったく変わってしまった

「まあ……もう受け入れられないのは重々承知だけど……ね」

青年は先ほどの男達に笑われた事を頭の隅におきながら、自分の幼い頃を思い浮かべた

青年がまだ少年のころ、厳格な父に育てられた少年はそのころからマジシャンに憧れていた

ただまだそのころは、マジックは本当に仕掛けも無く「魔法」だと思ってた

テレビに出ているマジシャンのマジックをまねて同じ動作をしたが、仕掛けなど用意してないので、出来る筈がない

「なにをやってる？」

いきなり声を掛けられ体がビクッと驚き、声がした方に顔を向ける

「ふう……またこんなつまらんものを見ていたのか……」

「父さん!？」

少年の父は呆れた顔をしながらテレビを消す

「こんなくだらん物を見る暇があったら勉強しろ!将来に役立たん事などするな!」

「……はい」

何故のこ人はこんなにもすばらしい事をくだらないで済ますのだろ

う？その言葉を心にしまいながら

その夜、マジックと父の事を考えながら布団に入る

なぜ父さんはあんなにも否定するのだろう？あんなに不思議な事が目の前でおきて楽しませてくれるのに

たとえば――手を軽く握った後、開いたらビー球があるとか――

手を握り、手を開くだけ　これだけで僕の手の中にビー球が……

「あつた……！？」

それは今までの中での一番の奇跡、種も仕掛けも無いのに……　まるで魔法の様な出来事

――……

――…

――…

その後、青年は父と解りあう事無く、そのまま父は生の終わりをつげてしまった

青年は思う

この後の仕事も、これから馬鹿にされつつづけるのだろう

ああ……もし僕のマジックで人を驚かせ、楽しませ、感動させられる……僕にとっての理想郷があったら……

青年は目を瞑りながらあるはずもない理想郷を思い浮かべる

ただ青年は強く思う、理想郷に行きたいと

「これから僕の瞬間移動をはじめます」

出来るはずも無い、そんな場所など無いし種も仕掛けも無い
だが、昔起きたあの奇跡 あの出来ない事が出来たあの奇跡を
もう一度

「3」

僕を笑った男達

「2」

僕とマジックを理解してくれなかった父さん

「1」

この進みすぎた現代

さよなら

パチンツと指を鳴らす

目を開ければそこには

先程とはまったくちがう、まるで森の中のような場所と

棍棒をもった三つ目の化け物がいた

現代？さよなら（後書き）

文章がひどい？文才など幻想などにすぎんよ

感想などもらえるとうれしいです

妖怪？ばいばい（前書き）

よくよく考えれば東方あんまり知らないなあ…

駄文だぜ、文章めちやくちや、無理な方はバックすいしよーですぜ

妖怪？ばいばい

ありえない

いきなり目の前の背景が変わり

何故か涎を垂らしながらこっちを見てくる化け物

マジックがどうのこうのって言ってる場合じゃないよまったく

青年は目の前の事が理解できないでいた

否、理解したくも無く、本能が危険警告点滅 要するとにかく
逃げろとささやいている

すぐ目の前にいる人間にしては多すぎる目と赤黒い模様があるお洒
落な棍棒を持つ化け物

化け物もいきなり現れたであろう青年を見て最初は目を丸くしてた
ものを、次には口元もニヤリと歪めた

「人間だあ、今日は久しぶりに大漁だなあ」

ああ、きつとあのお洒落な棍棒の模様は人の血なんだな、とすぐ理
解した

「確かに違う所に行きたいとは願ったけど… これは何か違うなあ」

いつもと変わらない笑顔でそうばやく青年のに対し、化け物は余程
嬉しいのだろう聞いてもないのに自分の事をしゃべりだした

「さつきも人間のガキを食べたがあやっぱり小さいからなあ、もう
一人ぐらい食いたいと思ってたんだよ」

子供を食べた、そんな事を聞いてこの場にいられるはずも無い

「あ、そうですか… それでは」

軽く頭を下げ化け物がある反対方向に足を向けとりあえず森を抜け
ようとするがまた本能が警告する

避けられなければ確実に死ぬ

「っ！？」

その場から横に飛びながら先ほど自分がいた場所に目を向けると、棍棒が地面を叩きつけていた
地面にか小さいクレーターもどきができており、あの場から避けないでいたらと思うとゾツとするのを肌と感じた

「ん？　よけやがったかあ？」

ゆっくりと青年をみる化け物は少し驚いたように、そして今度は絶対にはずさないと無駄に息巻いている

青年は笑顔のまま、内心恐怖で泣きそうになりながらも化け物を見る

「さーて、次ははずさねえ」

あの時避けられたのは本当に偶然、勝手に体が動いたといっても過言ではなかった

だが今度は恐怖で体は動かず、棍棒を振りかぶっている化け物が

「なにが理想郷だ…　ただの地獄じゃないか」

きっとこの化け物は躊躇なく僕を殺し、噛んで、噛み砕いて、胃の中にいれられ僕の一生は終わるのだろう

奇跡なんかじゃなかった、こんな信じられない化け物、世界、運命、

すべては時代の流れに身を任せなかった罰なのだろうか？

「この世界、いいことなんてありやしない」

世界を恨む、どうして受け入れてもらえないのだろう、マジックの
なにかいけないのか

何故こんな目に合わなければならぬのか、こんな見知らぬ土地で
一生を終わらせなければならぬのか

だから

僕の奇術で八つ当たりをしよう

できるはずのない奇跡ができたんだ

なら今度もできるはず

本来ならありえない、残酷な奇術

「おまちなさい妖怪さん、僕を殺す前におもしろいものをみせてあげよう」

化け物、もとい妖怪は先ほどまで地べたすわりこんでいた青年のいき
なりの変わり身に面食らいながらもきつと、命乞いだろうと思う
する

いままでの人間はそうだった、自分に捕らえられたあとは必ず命乞
いをする、涙と鼻水をたらし、無様な面で

その光景をみるのが妖怪である自分は堪らなく好きだった

今回もそうだろう、そして命乞いをした後は、遊んで嬲り殺して食ってやるう

「クク… いいだろう、はやく命乞いをしてみる!」

もはや妖怪は青年が命乞いをすると確信している

それが盲信だと知らずに

青年は荷物のケースを開け、赤い布を取り出す

「それでは、僕の奇術をご覧ください」

なに?と顔をしかめる妖怪に対し、青年はうさんくさい笑顔をより深めたままスツと妖怪の懐に入り込む

「なっ!?!」

「それではこれから、妖怪さんの下半身だけを消しましょう」

青年が命乞いをすると思わなかった妖怪だが、それどころが青年は自分からこちらに近づいてきたのだ

驚く妖怪だが、その事よりも妖怪の本能が騒いでいた

はやく人間を殺さなければ自分が死ぬ

だが青年は始めていた、最悪な奇術を

布を両手で広げ、自分から妖怪の下半身を見えなくなるよう隠す

「1」

妖怪が棍棒を構え

「2」

棍棒を振り下ろし

「3！」

バサツと青年は布を取ると

「あらら、妖怪さんの下半身、どこかにいつちやいましたね」

ドスン！ と地面に上半身が落ちる音と共に、妖怪の視線が下に落ちる

上半身から下にあるはずの物がなく、代わりに行き場を失った血がどくどくと流れる

妖怪は思っ、もう少し早ければ、あそこで殺しとけば自分が勝者だったのに

そんな事を考えている内に眠気が襲い、体に力が入らなくなる

「今宵の奇術、お楽しみいただけたでしょうか？」

胡散臭い笑顔を顔に貼り付けた人間を見て理解した

ああ… こいつは人間の仮面を被った悪魔だ

その瞬間、妖怪は生の終わりをつけた

青年は妖怪が事切れた事を確認すると、その場で吐いた

「おええッ！ んぐ、おゝえゝええ」

緊張から開放され、しかも人ではない者を仕方が無いとはいえ殺してしまった

そして綺麗に切断された妖怪の中から先ほど食べたのであろう子供の手足が出てきていた

その事が青年を一気に現実に戻し、精神にダメージを与えていた

「うぐ…っはあ、はあ」

それでも青年は笑顔を絶やさない、奇術師は笑顔を絶やしてはならない

心内を知られては奇術師失格だから

笑顔を崩してはならない

どんな場面でも

どんな胡散臭い笑顔でも

盛大に胃液をぶちまけた後、木に寄りかかりながらさっきの事を考えながら唸っていた

「なんであんな事ができたんだろう？」

前にも起きた小さな奇跡、このとんでもない所に送られた最悪の奇跡、妖怪の下半身を消した最低な奇跡

そう、まるで魔法の様な出来事

そしてこの魔法の様な出来事はあることををしなければ出来ない事に気がつく

いくら目の前に何か現れる様に念じても何もでないが、マジックをする動作、例えば手を閉じて手の中を見れないようにした後念じると、そこにはまたビー球がでてくる

つまりこの力はマジックの動作をしなければならぬのだ

「種の無いマジックねえ」

それはある意味、奇術師にとっては嬉しい事でもあるが、同時に複雑な気持ちにもなる

今まで練習してきた奇術はいつたいたんだっただのだろうか？
それでも、幼い頃に夢見た魔法の様な事ができるのは嬉しい

「さて… そろそろ移動しますか」

この場にいたらまたあんなのに襲われるかもしれない
はやく人のいる場所に行き、安心したい

そう思い青年は重たい足に活をいれ、周りは草木だらけの道を歩いていく

それは最高で最悪な奇術を身に着けてしまった青年のお話・・・

『腹黒い奇術師』

名前

・八神 昂

種族

・人間

能力

・ ができる程度の能力（なぜか書いてもすぐ墨が滲んで見えなくなってしまう）

危険度

・ ????

人間友好度

・ 極高

主な活動場所

????

外の世界で能力を開花させ、自分の能力で幻想郷にきてしまった人間。

いつも作り物の様な笑顔を貼り付け、不気味がられている。

見た目は男性にしては髪が長く、首まで伸ばしている。

顔は美形だが、狐の様に目が細い。

普段礼儀正しいが、さり気なく毒や嘘を吐いたりと心内の中では黒い感情が渦巻いているのかもしれない

恐らく鬼との相性は最悪。

外の世界でも奇術で仕事をしていたらしいのだが、受け入れられなかったとの事

幻想郷にきてからは仕事がやりやすく、また、能力？により様々な奇術が出来るようになったらしい。

追記、修正必要あり

妖怪？ばいばい（後書き）

駄文？それは現実ですねはい

感想もらえると嬉しいーです

宵闇の妖怪？いらっしやい（前書き）

あれ？一日なにしてたんだろう

文章どんまい

宵闇の妖怪？いらっしやい

周りは緑だらけの森

時たま聞こえる何かの鳴き声

こんな場所からはやくおさらばしたい

すこしだけ付いてしまった血の匂いを漂わせながら歩く

その血の匂いにつられて寄ってくる少女が一人

もうどのくらい歩いたろうか、気が付けば晴天だった空が夕焼けに
そまりつつあった

日が暮れる度に増す何かの鳴き声、ざわめく草木の中、昴は焦りな
がら森からの脱出を試みたが、とても広い森なのか、出口がみつか

らない

「はやく一息つける所につかなければ」

いつまたあのような妖怪が出てくるかわからない

だがあの妖怪はさきほど子供を食べたと言ったところから、人が住んでる場所がすぐ近くにあると思った

もしかしたら人がいる反対方向に進んでいるのではないか？ 一度そう考えて来た道を戻ろうかと迷うが、恐らく暗くなるにつれて妖怪が活発になるのだろう

そう考えいまさら戻っても危険、だからといって進むのも危険、どこもかしこも危険しかない

「万事休すってこの事をいうのかな？」

だが本当の万事休すを体験するのはもう少し先の事だった

パチンツと指を鳴らし、布を地面から取るとそこにはキャンブグッズが現れた

「この力、ほんとに便利だな」

今日一日色んな出来事があり、精神と肉体ともに疲労が募つてると感じ、今日のところはテントで一夜をすごそうと考えた
能力でテントとライターをだし、テントを組み立てた後に小枝を集め、ライターで火をつける

「明日は人に会えるといいな」

明日こそは人に会い、一時的にいいから平和に過ごしたいものだ、
と思いながら焚き火で体を温める

妖怪と殺しあつた事やこの場の雰囲気吞まれて考えが甘くなつて
いたのだろう
もし暗闇の中、一つの灯火があつたら誰だつて疑問に持ち、近づく
だろう

それが例え妖怪だとしても

その事に気づいたのはその後少しの事だつた
腹の虫が泣き、夕食を食べようと思つたとき、ふとあの時の事があ
たまによぎつた

あの妖怪は食事として人間を食つていた、つまり妖怪は人を食らう
ことがこの世の摂理であるのである
そのことに気づき、急いで火を消す

——これじゃ食ってくれって言つてる様なものじゃないか

慌てて火を消してる中、風でざわめく

その音と共に、ザッザッザッと足音が近づいてくる

昴の行動は遅すぎた、もう少し早ければ誤魔化せたのかもしれない

ドクンッと心臓が嫌に高鳴るのがわかる

毛穴から冷や汗がながれ落ち、足音が近づくにつれて汗の量が増える

また殺し合いをしなければいけないのか？ 今度も勝てるか？ 死
なないで済むか？

頭の中でぐるぐると考えが回る中、足音は目前まで近づいていた。
いつものように張り付いた笑顔で足音がする方を見る、吐きそうに
なりながらも

そして現れたのは

「こんばんは、お兄ちゃん♪」

ニコリと見惚れる様な笑顔で挨拶をしてくる少女だった

少女？馬鹿言っちゃいけないよ

この化け物が住む森に少女が、しかも夜にいるわけない

少女の口があんなに赤くなってる訳ないだろ？

獲物を見るような目をするのがただの少女なわけないだろ？

きつこの子は

妖怪だ

「どうしたの？ お兄ちゃん、挨拶したんだから返事してよ」

「ッ！」

恐怖で口が回らない、目の前の少女は小柄なのに、鼻は自分より何倍も大きく見えた

「ふふ… もしかしてこわいのか？」

「……ふう、ほんとにここは地獄なんじゃ……？」

「あ、やっと喋った！ お兄ちゃん、笑ってるし私の事こわくないのか？」

怖いに決まってるんだろ！ 口に出そうになるが飲み込む
悪態をついたってきつこの子はそれを意に介さないだろうし、す

ぐに殺し合いが始まる

嫌でも解ってしまつてため息がでてしまう

その事に気づかない少女は、ニコニコと可愛い笑顔を振りまきながら鼻に問う

もはや解っていた事、それでももしかしたら……なんて事はあるはずない、解っている

「あなたは食べてもいい人類？」

食べていい人類食べちゃだめな人類なんてあるのだろうか？

「わは〜！ お兄ちゃんすごくおいしい〜！」

決して自分が食べられてる訳では無い

確かに殺し合いにはなりそうだったが、考えた末何とか助かった

—— 相手が腹をすかしてるのなら、別に人間じゃなくてもいいのではないだろうか？

自分の能力なら食べ物もだせるはず、それならば……

そう考えた瞬間噛み付かれそうになりいそいで目を瞑り、能力を発動させる

「この子の後ろに移動！ 3、2、1！」

ガブッと腕に噛み付かれた瞬間パチンと指を鳴らす

体が一瞬フツと軽くなったかと思うと、すぐに地面の感覚がよみがえってきた

「あれ？ お兄ちゃんいつのまにそっちにいったの？」

裏を見ると首を軽く傾げながらキラキラした目でこちらを見てくる恐らくもつすこし遅れていたら腕から血肉と骨が丸見えの状態になっただろう

ブルッと背筋が震えるのを感じながらも目の前の少女に提案を持ち

かける

「僕がおいしい食べ物をあげるのから見逃してください！」

プライドもへったくれも無い

やはり子供にはカレーだろう、そう考え女の子をなんとか座らせすぐ用意をする

「それではご覧ください、この布をとった瞬間おいしいカレーが出てきますよ」

はじめはカレーなんて知らないのか首を傾げていたが、おいしいと聞くと目を輝かせ、まだかまだかと待っている

そんな姿を見てやっぱり妖怪でも子供は子供なのか、と感じながら布を取る

「おおー！すごいー！」

目の前には湯気を立ててるカレーがでてきた

「さあ、召し上がれ」

「いただきます！」

ニコニコと少女はカレーを平らげていく

「わは〜！ お兄ちゃんすごくおいしい〜！」

これがこれまでの出来事、命を取らずに解決でいた出来事だがまだ緊張を緩めず、少女から視線をはずさずにいる

ふと思い出したように少女は尋ねる

「そつえば、お兄さん」

「ん？ どうしたの？」

「お兄ちゃんの名前はなんていうの？」

一瞬、果たして教えていいのだろうかと考えたが、この少し頭が緩そうな少女なら大丈夫だろう
そう思った

「僕の名前かい？ 僕は八神 昴、奇術師だよ」

「昴っていつのか〜」

恐らくこの子は奇術師の事は知らないのだろう、一切触れてこなかった

きつとなにも無いところからカレーをだせる人的な位置づけ

「私はルーミア！ 妖怪だよ！」

「そっか、やっぱり妖怪だね、うん、解ってたよ」

こんな見た目は害のなさそうな少女が妖怪

きつとこの子も数多くの人を食べてきたのだろう、そう考えるとこの妖怪の子、ルーミアが恐ろしい存在だということが蘇ってきたこのままカレーだけを食べて満足するだろうか？ 襲い掛かってこないだろうか？ 不安がよぎる中ポツリと

「お兄ちゃんの事は食べないから大丈夫だよ」

ビクッと体が一瞬震えた

まさか考えてる事が顔に出てしまったのだろうか？ いや、この笑顔をかえることは出来ない、今は絶対に

「大丈夫、お兄ちゃんの事は絶対食べないよ」

「……ルーミアちゃんは人の心が読めるのかい？」

ルーミアは首を横に振り

「だって、私も相手が巫女だったらそう考えるもの」

……巫女ってのが誰だか知らないが、この子は案外鋭いのかも
れない

その後、ルーミアはカレーのおかわりを平らげた後、テントの中に何故か一緒に入り、昴のあぐらの上にすわり、なにが楽しいのかニコニコしている

昴にギュっと抱きついてみたり、胸に顔を埋めてみたり、匂いをかいでみたり

その度にルーミアは顔をだらつと緩め、まるで自分の最愛なものを見つめるかのように昴の顔を見る

その視線を受けてもやはり胡散臭い笑顔を貼り付けたまま、内心これは犯罪の香が漂ってるのではない？と苦悩している

「ルーミアちゃん、そろそろ離れて？」

「わは」

「ル、ルーミアちゃん？そろそろは」

「わは」

「ル、」

「わは」

「なんでもないです、はい」

どうしたものだろうか……？

これは、何故か宵闇の妖怪ルーミアに懷かれてしまった奇術師のお話
二人は危険な森の中、ゆっくりと目を瞑り、今だけは妖怪に襲われ
ませんように
そう願う意識を放した

友達は私にだっている

いつも仲良く遊んでいて、親友ともいえる

でもそれだけじゃ物足りない、そう思ってたときの事

見慣れない服の人間を見つけ食べようとしたが、その人間は不思議な力で私を惑わし、その後ご飯を恵んでくれた

この人は長生きできないだろうな

妖怪の私でもそう思うほど甘い

でもその甘さは、何故か心地いい

その人に抱きつき、頭を撫でられて、匂いをかいで

……いままでかいだことのない甘い香、頭がくらくらするような香
きつとこの匂いは私を惑わす罠

それでもこの人に抱きつけばほっとする

そして顔をみればニコニコと綺麗な笑顔

私はきつとこの人の言った「奇術」に引っかかってしまった

それでもいい、私はこの人の優しさに触れて満足

だから

——はなさいよ？ おにいちゃん

わは
ゝ

ある妖怪の心内より

宵闇の妖怪？いらっしゃい（後書き）

矛盾？幻想にしといてよ

感想もらえるとわはーになります

ルーミア？またね（前書き）

主人公性格定まらん

ルーミア？またね

目を覚ますと、周りは真っ暗だった

いや、暗いなんてものじゃない、まるで闇だ

「ほんとにここはなんでもありか……」

空に陽がのぼりまた新しい一日を告げたが、朝一のあの闇の中にいた時はとうとう死んだと冷や汗ダラダラだった
周りは真っ暗闇の中、手を伸ばしても何も触れられないと思ったが、すぐ横に手をやると柔らかな感触が指に伝わった

「お、おにいちゃん……結構狼さんなのか」

バッと手を離し慌ててその場からあとずさる

「ルーミアちゃんか？」

さっきの声には聞き覚えがあり、昨日は殺し合いモドキ、それに夕飯をご馳走した他人以上敵対未満の妖怪ルーミアの声だった

「そつだよ、おはようお兄ちゃん！」

元気の挨拶の後に周りの闇が消えていき、太陽の光がテントの隙間から差し込む

ルーミアの姿を確認し、ほっと安心する

「おはようルーミアちゃん、もしかしてさっきの暗闇はルーミアちゃんかい？」

ルーミアはニコニコしながら昂に飛びつき、おっと、と昂は少々驚きながらもルーミアを支えた

「うん、そつだよ！ 私は闇を操れるからね」

「闇を操れる？」

「そつだよ！ 『闇を操る程度の能力』 これが私の能力！」

なんとまあ聞くだけなら想像するだけで怖い能力である

もしかしたらこの子とはとてもなく強い妖怪なのではないだろうか？ 不安がよぎるが今のところ無害なので放っておくことにする

「でもなんであの闇を使ってたんだい？」

これが一番の疑問であり、なぜ能力を使う必要があったのだろうか？

「だって、あのままじゃお兄ちゃん食べられちゃってたよ？」

……つまりこの危険な森の中で寝ている自分を守るために暗闇を展開して守ってくれていたのだという

ここは私がいるぞ、手出ししたら容赦しないよ？ と回りに示していたというのだ

その説明を聞いてやはりこの子はかなりの強さをもった妖怪なのだろうかと恐れる反面、守ってくれたルーミアに感謝していた
本当にここは不思議な世界だ、あんな醜い化け物もいるが、こんな可愛らしい妖怪もいる

ふう、つとため息がでる。一体ここにきて何回ため息がでただろうか

鼻がため息を吐いたときに、ルーミアは少し顔を赤く染めながら内股でもじもじしながら鼻の顔をじっと見つめる

「お兄ちゃん……さつき……私の胸さわったのか？」

ゴホッと咳き込むと同時に先ほどの柔らかい感触を思い出す
あれはルーミアの胸だったのか、と思う罪悪感と共にこれは不可抗力なのでは？ と苦悩する

が、ルーミアをよく見れば確かに可愛い容姿をしていて、恥ずかしそうに下を向いているところをみれば確かに魅力的なのだが

だが！ 残念な事に幼児体系といっても過言ではないルーミアの体、女性の経験は無いが触ったあの柔らかい感触が胸だと思わなかった、つまりツルペタ。

すうっと頭の中がクリアになり、外面は笑顔でも内心青くなっていた心はクールになっていった

ううう、と潤んだ瞳で見つめてくるルーミアに対し、昂はクールになっっていた

いや、なりすぎていた

「ふっ…」

鼻で笑う

そんなの胸っていわねーよ、アホ

言っでは無いが言っただも同然な態度

この世界にきて始めて昂が少し腹黒い一面を見せた時だった

「え？」

最初は何故昴が小ばかにしたように笑うのかわからなかったルーミアだが、昴の視線をたどると自分の胸に。

自分の胸と昴の視線でだんだんと解ってきたルーミア。

ルーミアは確かに妖怪だがその前にれっきとした女の子である
自分自身のコンプレックスだとも言える胸を笑われた

怒り、悲しみなどの感情が渦巻く
そして

（ちいさい胸でも、いや、私の胸しか満足できないようにしてやる）

ルーミアは昨日会ったばかりだが昴にとっても懐いている
自由気ままに生きるのがルーミアの生活スタイルだったが、変わり
者の奇術師、昴に会い、今まで感じなかった温もりを知ってしまった
自分を食べようとしたのに今では近くに居て、ご飯もくれた
きっと危険から逃れる為にやった事なのだろうが、それでも、この
暖かい場所は手放したくない

きつと昴はこの幻想郷で数々の女性に会っただろう

そしたら、もしかしたら昴は違う女の所に行ってしまうかもしれない

（だから、今のうちに虜にしなきゃ）

その後、怒り狂った様に暴れ、自分の胸の素晴らしさと唱えながら触らせようとするルーミアを、弁解しながらもすこし胸に触れてしまったりしながらなだめようとする奇術師の姿が確認されたとか

「まったく、ひどいめにあつたよ」

「役得でしょ？」

なんとかルーミアを押さえこみ、といつても力では勝てないので奇術で周りこんだり、驚かせたりしながらなだめて、人里に向かっているところだった

昴は歩いて行こうとしたがルーミアが「とばないのか？」と空中に浮かびながら聞いてきたが、人間は飛べない驚きながら説明するも、ここの巫女などの人間は空を飛べるらしい
もはやそれは人間じゃないよ、言いたくても言わない

「それにしてもお兄ちゃん、いいにおいがするのだー」

昴が飛べないと知ると、昴に抱きつきだつこの状態で移動する羽目に。

その時、ルーミアが胸に顔をうずめ、スンスンと匂いをかいできた

「いいにおいかい？自分では解らないけど……」

「すごくいい香りがするのだー！甘くて、引き寄せられるような…
…頭がしびれる様なにほい！」

どんなの香りだろうか？ 頭が痺れる時点で害がありそうだが

ルーミアに道を案内してもらい、長い道のりを歩くと、前には里が見えてきた

「……里？」

そう、里であった。町ではなく里
あるのは畑と家や店、時代遅れにも程がある場所

「あゝ、やっぱりここ違う世界なんだ」

そう嘆いた後、この世界に来て何回か目のため息を吐いた

人里に行こうとすると、ルーミア如く妖怪はあまり良い目で見られなく、人食い妖怪であるルーミア自身も里の人に恨まれてるらしいので里には入れないとの事

確かに人食い妖怪が里に入ったらただ事ではなくなると思い、ルーミアに一旦別れをつけようとしたが、うるうるとまるで別れたくないと眼が語っているような気がした

あくまで気がしたなので、ルーミアに一時のお別れを言う

「ルーミア、ここまで付いてきてくれてありがとう。一旦お別れになっちゃ

「や!」

多分こうなると思ってた

何故かよく懷いてたルーミアは多分離れないだろうと

だから

「ルーミアちゃん」

ルーミアに奇術を送る

「ルーミアちゃんの目の前にはいっぱいのお菓子があります」

ルーミアは気づく

「3」

お兄ちゃんはどこかに行ってしまうと

「2」

慌てて止めようとする

「1」

パチン

ドサッと見た事も無い紙の袋が目の前に落ちる
その代わりに、昴は姿を消した

決して昴はルーミアが嫌いなわけでは無い
むしろ妹がいるみたいで楽しいとも感じた
だが相手は妖怪、いくら相手が自分が安全だといっても気が休まら
ない
それ故、昴は逃げた

臆病な奇術師は逃げた

また会いに行くからと言いつく残して

やっと人里に着き安心する昴

ここにいれば少しは安心して過ごせそうだ

宿はどうしようか、お金はつかえないだろうか、などと考える中、
門番の方々が

「まて！ その怪しい奴！」

あるえー？

ルーミア？またね（後書き）

展開がはい？幻想になればいいなあ

後半適当になってしまった、すんません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1250ba/>

奇術師が幻想入り

2012年1月4日14時52分発行